

「注意」答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その頃私たちは、父の勤め先のある田舎に暮らしていました。七人の兄妹の中、上二人の兄たちは、東京の方に残され、下の二人はまだ小さかったので、二つ年下の弟の隆と、その下の妹の与志子と、私との三人が、工場からは小一里も距った町の小学校へ通っていたのです。

私たちのお父さんは、ふだんは随分優しく子供には眼のない方でしたが、学校のことになると、まるで人が違ったようにきびしくって、その、一里も先の小学校へゆくのに、雨が降ろうが風が吹こうが、一日として休めと云ってくれたことがなく、又、人力車になども乗せようとはしてくれなかったのです。

「丈夫な子供が、歩いて学校へ行けないなんて恥かしいことだ。」

けれど——秩父風の——吹きおろしてくる寒い冬の朝など、東京に住み慣れた私たちの耳は、風と一しよに吹き飛んでしまふかと思われる位なものでした。

私はいま、こうしているうちにも、ひろびろと吹きさらす田圃路を、①木枯に吹き飛ばされるようにコトコトとあるいてゆく、小さい私たちの姿を思い浮べます。ほんとうにその頃の私たち——ことに、まだ漸くその年の春一年生になったばかりの与志子などは、一吹き風の風にも飛ばされてしまいそうな小さい子供でありました。

どんよりと昨日から曇っていた空が、夜明けから雪を落して来た、ある朝のことでした。

「大したことあるまいと思うけれど、風があつて寒いから、今朝だけは汽車にのせて行つてお貰い——」

私たちは母にそう云われたので、大喜びで鞆を背負うと、庭先きへとび出しました。汽車——と云うのは毎日朝と晩との二回ずつ、町と工場との間を往復する会社専用の貨物列車のことなのです。私たちは毎朝、学校へゆく時に、私たちのうしろから工場を出て、じきに私たちを追い越して先きに見えなくなつてゆく汽車を、どんなに羨ましく思っていたことだったでしょう。

「あの汽車にのせて行つてもらえたら、随分楽なだけかもしれません。」

そう思っていたその汽車に、今朝は乗せて貰えとお母さんが云うのですから、私たちが大喜びしたのも無理はありませんでしょう。

それで私たちは、貨車の車掌さんに頼んで貰うため、女中に毛布を持つてもらつて、家を出ようとしたのです。

門口で、事務所から何かの用事で帰ってきた父にばったり逢いました。

「どこへ行くのか。」

と、父がききました。

「あの、奥さまが嬢ちゃんたちを汽車に乘せて貰うように、頼んでいとおっしゃいますので——」

女中の云いかける言葉を、お父さんがさえぎりしました。

「いけない——うちの子供たちを乗せたら、みんな他の子供たちも乗せなければならぬ。あの汽車はみんな乗せるほど、そんなに空いてはいないのだ——。道代も隆もあるいてゆきなさい。これ位の雪、丈夫な子供があるけないうちで出かけたのだ。」

私はその時ほど、お父さんを憎らしく思ったことはありませぬ。私たちは今までの喜びの天辺から、まさかさまにつき落されたのです。私は、泣きそうになっている小さい与志子の手を握つて、意地悪くくると向きをかえて黙つてあるき出しました。弟の隆もつづいてあるき出しました。

「おいみんな、行つてまいりますと云わないのかい。」

父の声がうしろから云いました。

「行つてまいります。お父さん。」

振り向いて、立ちどまつて、隆と与志子とは素直に挨拶しました。けれど、私はわざと返事もしないで、平気でぐんぐん妹の手を引っぱりました。

「誰が、お父さんなんか——行つてまいりますなんて云うものか。」

②一里の路が今日ほど遠く、今日ほどつらく思えたことはありませんでした。そしてその遠い路を、私は一言も口を利かずに黙つてあるいて行つたのです。

「私たちが雪に埋まつて死んでしまつたら、お父さんは泣くといい。」

——しかし、おかしいことに、その面当をするのには、あまりに積つていない浅い雪でありました。

学校にいるうちも、雪は少しの休みもなく降りつづいて、教室の硝子窓のそとは、チラチラ動く白い色で曇ったきり晴れませんでした。

「この雪の中を、またあるいて帰るのか。」

そう思うと私は、又してもお父さんを憎らしがらないではいられませんでした。

「みんなよその子にはお迎えがきている③——だのに——一番遠いのに——」

最後の時間の終るころ、小使いさんが教室に入ってきました。そして先生に何かささやくと、又そつと出てゆきました。

（一年生の与志子は姉さんの私を待つために、寒いので今日は私の机の傍に、並んでチヨコンと腰かけて、みんなの授業をみておりました）

やがて授業時間が終つた時、先生は私たちの方を見ていいました。

「うちから人力車が迎いにきていますよ。」

あ！と叫びたいほどの意外さでありました。私は叫びたい声を飲んだまま、思わず与志子の方を振り向きしました。その時の与志子の小さい顔の、どんなにか子供らしい嬉しさに輝いていましたことか——おお、与志子はこんなにも喜んでい

です。ほんとうに小さい与志子にとつて、この雪の一里の路は、どんなに遠く悲しい路であつたかしれないのです。

— だのに — 私 は —

④私は妹のような素直な心で、父のはからいを喜びはしなかったのです。

「お父さんはどうとう、自分の説をまげてしまったではないか、そしてとうとう人力車なんかよこしたではないか。お父さんは今朝のことで、きつと私たちに気の毒をしたと思っているのだ——」

何となく今朝のしかえしをしたような、やや痛快な気持ちでした。それだけではない。私はそこまで折れてきた父の心を見ると、なお、もつと意地わるくなつたものです。

「お父さんは今朝あんなにも云ったくせに——いま頃人力車をよこしたって、誰が乗って帰るものか。」

門の前には一台の人力車が待っていました。人力車屋さんは私たちの姿を見ると、幌をひらいていました。

「お嬢さんたちだけ乗ってお帰りなさいましとおつしやいました。坊ちゃんぼうちんは男だから……」

いいかげようとする言葉を、みんなまできかずに私はつつぱねたのでした。

「男だつて女だつて寒いことは同じだわ。——私、乗らないで歩いて帰る——⑤A けさお父さんは、雪位くらいにあるけなないことはないとおっしゃったんだもの——私たちだけのせて、他の子をのせないなんてことは出来ないつて、⑤B ちゃんとそうおっしゃったんだもの。」

「でも——」と、人力車屋さんは困ったように云いました。

「折角^{せっかく}お迎えにきたんですから。」

「厭^{いや} 私たちは歩いてかえる——⑤Cお父さんが今朝おつし
やっただから——」

私は与志子の顔に湧わいているであらう失望の色を、わざと知らないふりをして、ぐんぐん先に立つてあるき出しました。けれど、与志子は今朝のように、すぐ私については来ませんでした。可哀かわいそうに、与志子は、行く手をすっかり閉とぎしている雪の幕におびえたように、心残りらしく人力車の方をふりかえつて、あるき出ししづつているのです。その与志子の様子を見て、人力車屋さんがもう一度云いました。

「では、小さい嬢ちゃんだけでも乗っておいでになりませんか。」
与志子は私の顔を見ながら立ちどまりました。つむじ曲りの、
意地つぱりの姉さんさえ居なかったら——いえ、明日も又学校
へつれて来てもらうことさえなかったら——すぐにもとんで行
つて幌の中に入りたかつたのに違いありません。しかし、その
与志子の気持を私は知ると、まるで彼女が自分を裏切りでもし
たような憤りを感じたのです。
いきとお

「よつち、やん、乗りたければ一人で乗っておいで、みんながあるいて帰るのに、あなただけ乗っていいつもりなら乗ってゆ

くといひいひ。」

いくら小さい与志子でも、⑥姉の言葉の針をしらない筈はなかつたのです。与志子はおぶりを振つて、黙つて私についてあるき出しました。私は勝ち誇つたように、妹に云つたものです。

「そうよ。みんな他の子があるくのに、私たちばかり人力車で帰るのはわるいことよ。」

けれど、私の心のうちに、ほんとうにそういう気持があつた
 でしょうか。私がそう云う言葉をくりかえしたのは、ただお父
 さんに対する意地だけだったのです。それに私は、妹に人力車
 に乗つて帰られることが厭だったのです。何故——それは自分
 も乗りたくつてたまらないものだったからです。

吹雪フキユキの路を、私は妹の手を握り、弟と肩をよせてあるいてゆきました。風の横なぐりにくる度たびに、眼のあけられなくなる私たちは、立ちどまつては又あるき出しました。人力車屋さんは路の半程なかほどまで、私たちについて、しきりに乗ることをすすめていきましたが、やがて根気が尽つきたようにだんだん足を早めて、いつか雪の向むかうに見えなくなつてしまつたのです。人力車屋さんの姿が見えなくなると、与志子はしくしく泣き出しました。

可哀そうに——妹は、いつか姉さんの心が折れて、自分に人力車に乗れと云つてくれないか——と、心だのみにしていたのです。私は与志子のいじらしい心持こころもちを察すると、小さな肩を抱だきしめてあやまりたい氣持で一ぱいでした。けれど私はその氣持を、心とはまるで反対な言葉で云い現あらわしたのであります。

「そんなに泣くほど乗れたければ、一人でさっさと乗って行けばいいのに——ほんとうに、厭なひとよ。」

⑦あとはだんまりこくつてあるいてゆくばかりでした。
家に着いた時には、もうそとは薄暗く、室内には明りが光つていました。人力車屋さんの報告が先に行っていたとみえて、私たちが玄関を入るとすぐ、お母さんが駆け出してきました。

「まあ、なぜ人力車にのつて来なかつたの、あれはお父さんが、折角おやりになつたんだのに——自分が乗りたくなくなつたら、せめて与志子だけでも、乗せて帰すが好かつたではないか。可哀そうに、こんな小さい者を歩かせて——」

⑧ 与志子が急に、ワツと声をあげて泣き出しました。

「ほんとに姉さんらしくもない強情よ。」

と、お母さんは与志子の髪を撫でながらつづけました。

「お父さんは今朝、あんなにしてお前たちを出しておやりに
なつたのが、あとで可哀そうにおなりになつたればこそ、御自
分が負けて人力車をおやりになつたんだのに、そのお氣持を踏
みつぶしてしまうなんて……」

私はお母さんの言葉を黙って聞いていました。何と云われても仕方のないことでした。

⑨「お父さんのお気持ちを踏みつぶしてしまった。」

——それは自分が、しようとしてしたことではありながら、
今、お母さんの言葉できかされると、たまらない悲しい気持ちで
した。⑩私が黙っているのを見ると、お母さんはこんどは優し

〔注意〕 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

受験番号

く云いました。

「お風呂が湧いているからすぐに与志子と入っておいで。帰ってきたらすぐ風呂に入れるように、湧しておいてやれと、お父さんがわざわざ事務所から電話をかけておよこしに言ったんですよ。」

私はその言葉を胸に痛く聞きながら、与志子と二人して湯殿へ入って行ったのでした。

与志子は暖かい湯気に包まれると、もうさつき雪の中での出来ごととはすっかり忘れてしまったように、明るい無邪気な顔を石鹸の泡の中で笑わせていました。でも私の心は、そうたやすく和ぎませんでした。⑪自分の意地を充分に通してしまつたあとに湧くいつもの寂しさ——でした。

湯殿の硝子戸が、いきなりガラリと明きました。

事務所から帰って来たお父さんでありました。

「みい助もよし兵工も（これは父の機嫌のいい時に呼ぶ私達の愛称です）帰ったね。お前たちなぜ人力車に乗って来なかったのだい。母さんが随分心配していたぞ——でも今日は全くお父さんがまいった。ふだんお父さんがあんなに云っていたのだからなあ——お前たちだけ人力車にのせようなんて、これはお父さんが悪るかった。」

問1 傍線①「木枯に吹き飛ばされるようにコトコトとあるいてゆく」とあるが、「コトコトとあるいてゆく」とはどのような様子を表しているのか、説明しなさい。

問2 傍線②「一里の路が今日ほど遠く、今日ほどつらく思えたことはありませんでした」とあるが、なぜそのように思えたのか、説明しなさい。

問3 傍線③「——だのに——一番遠いの——」のあとに言葉が続けるとしたら、どのような言葉が入るか、答えなさい。

問4 傍線④「私は妹のような素直な心で、父のはからいを喜びはしなかったのです」とあるが、「私」は、「父のはからい」をどのようなものとして受け取ろうとしたのか、説明しなさい。

問5 傍線⑤A「けさお父さんは、雪位にあるけないこととおっしゃったんだもの」、⑤B「ちゃんとそうおっしゃったんだもの」、⑤C「お父さんが今朝おっしゃったんだから」とあるように、「お父さん」が「おっしゃった」ことをくり返し述べていることから、「私」のどのような思いが読み取れるか、説明しなさい。

問6 傍線⑥「姉の言葉の針」とあるが、なぜ「針」という言葉を使っているのか、説明しなさい。

問7 傍線⑦「あとはだんまりこくってあるいてゆくばかりでした」とあるが、このときの「私」の気持ちを説明しなさい。

問8 傍線⑧「与志子が急に、ワツと声をあげて泣き出しました」とあるが、それはなぜか、説明しなさい。

問9 傍線⑨「『お父さんのお気持を踏みつぶしてしまった。』——それは自分が、しようとしてしたことではありながら、今、お母さんの言葉でかされると、たまらない悲しい気持でした」とあるが、「お父さんのお気持を踏みつぶしてしまった」ことを、「お母さんの言葉でかされると、たまらない悲しい気持」になったのはなぜか、説明しなさい。

私はお父さんの言葉を聞いているうちに、自分の胸を埋めている固い意地の、みるみる砕けてゆくのを感じました。⑫お父さんは私の、お父さんに楯ついていてる意地つぱりな心を、大変好い意味に解釈して、自分を咎めていらつしやるのです。そんなにもお父さんは、私を信じていらつしやるのです。このお父さんの信用と愛情とが、私の心を烈しく打ちました。私は眼のうちに、急につき上げてくる熱いものを感じました。けれど、私はお父さんにそれを見られるのが恥かしかつたので、いきなりジャブジャブと手拭を桶に浸して、顔を洗ったのでありました。

（北川千代『雪の日』）

※ 漢字・送りがななどが現代と異なるものがあるが、原文のままとした。ただし、かなづかいが現代かなづかいに改めた。

注1 小一里：一里は約四キロメートル。小一里はそれよりもやや短い距離。

注2 秩父風：秩父山地から吹きおろす風。

注3 小使いさん：用務員さんのこと。

注4 幌：風や雨をふせぐために車につけるおおい。

注5 かぶり：頭のこと。

注6 湯殿：浴室。風呂場。

問10 傍線⑩「私が黙っているのを見ると、お母さんはこんどは優しく云いました」とあるが、このときの「お母さん」は「私」に対してどう思ったのか、説明しなさい。

問11 傍線⑪「自分の意地を充分に通してしまったあとに湧くいつもの寂しさ」とあるが、「自分の意地を充分に通してしまったあと」に「私」の心に「寂しさ」が湧くのはなぜか、説明しなさい。

問12 傍線⑫「お父さんは私の、お父さんに楯ついている意地っぱりな心を、大変好い意味に解釈して」とあるが、お父さんはどのように解釈したのか、説明しなさい。

問13 次は傍線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

① カンセイはがきに書く。 ② テツボウで遊ぶ。 ③ けがをヨボウする。 ④ プレゼントをフンパツする。

⑤ フクギョウで部屋を貸す。 ⑥ お湯をハる。 ⑦ シャクトを変える。 ⑧ 多くのミンゾクが住んでいる国。

⑨ 事故の原因がハンメイする。 ⑩ 犬がアバれる。 ⑪ 畑にヒリョウをやる。 ⑫ 父のゾウシヨを整理する。

⑬ これは枝葉末節な問題だ。 ⑭ 安否を調べる。 ⑮ 屋外に集まる。 ⑯ 里心がついて実家に帰る。

⑰ 牧羊犬が群れをまとめる。 ⑱ 往年の大女優。 ⑲ 不作法な態度をとる。 ⑳ 合格祝いに赤飯をたく。

二〇二二年度

A

国語

(5)

解答用紙

受験番号

一

問 12	問 11	問 10	問 9	問 8	問 7	問 6	問 5	問 4	問 3	問 2	問 1

二

①	⑤	⑨	⑬	⑰
②	⑥	⑩	⑭	⑱
	る	れる		
③	⑦	⑪	⑮	⑲
④	⑧	⑫	⑯	⑳